

## 温庭筠, 李商隠疾病攷

小高 修司

中醫クリニック・コタカ

温庭筠は山西省太原の人。貞元17年(801年)~咸通7年(866年)本名は岐, 字は飛卿。一方李商隠は, 元和7年(812年)~大中12年(858年), 字は義山。ともに若い頃から頭脳明敏で天賦の才を有し, 「温李」と併称された晩唐の詩人・政治家である。

李商隠と温庭筠の比較論を第一に挙げるなら, 李商隠は自己の葛藤に苦しみ乍らも, 任官の為に耐え, その為に内向的思考が進んで挫折感, 絶望感を凝縮させ, 終には自己否定へと繋がる個性を有している。温庭筠は, 任官への願望を持ちながらも, それに執着して自己の意識を束縛すること無く禍咎を招きつつも不満や失望を大胆に, 外の世界へ向って発散させるといった個性を有している。

李商隠の両親の死亡年齢は父が60歳頃, 母は70歳を越えていたと推定され, 親から与えられる直接的な腎精の不足は少なく, 「先天の本」は充分にあったと考えられるにもかかわらず47歳で死亡している。家族歴をより詳しく見ると, 曾祖父は29歳で死亡, 祖父も早逝, 次姉である斐氏姉は20歳で死亡と, 何らかの家族性遺伝的素因の存在が示唆される状況である。結論としては「消渴」, つまり糖尿病と考えたが, その悪化要因として, 醸造酒の飲酒などの飲食の不摂生, さらにストレスを重視すべきと考えた。47歳帰郷後まもなく死亡していることから, 腎不全・心不全或いは脳卒中といった糖尿病による重篤な二次病態が死因である可能性を指摘したい。

一方, 温庭筠は庇護者の立場にある人を公然と批判したり, 高齢になってから門衛と諍いを起こし傷を負い裁判に持ち込もうとするなど, 心に何らかの障害があることが示唆される。専門医に相談したところ, 明らかな精神障害と云うことはできないが, 何らかの人格障害が示唆されるとして「自己愛性人格障害」と「アスペルガー症候群」の二つの病態を提示された。後者は一種の高機能な自閉症として知られているが, この病態の存在が一般に認知されてきたのは1980年代以降であり, 学会としてもいまだ診断基準が確定されていない状況である。

いくつかの特色を列記すれば, 「対人関係の障害や, 他者の気持ちの推測力, すなわち心の理論の障害が原因の1つと考えられている。特定の分野への強いこだわりを示したり, 時には運動機能の軽度な障害も見られたりする。」また「通常の人とは, 他者の仕草や雰囲気から多くの情報を集め, 相手の感情や認知の状態を読み取れる。しかし彼はこの能力が欠けており, 心を読むことが難しい。」「他人に自分の主張を否定されることに強く嫌悪感を覚えるという人もいる。高い知能と社交能力の低さを併せ持つと考える人もいる。」

そして確定的な事項として「社会に対し, 非常に適応しにくい困難さをかかえている。あちこちで衝突が起り, 引きこもりになっていることも少なくない。自分自身に強いコンプレックスを抱え, 二次障害でうつ病を発病したり, 自殺志願を持つ人も決して少なくない。」

若くして才人の誉れ高かった温庭筠が, 最後まで科擧に合格しなかったことなどはその一端かもしれない。『旧唐書』文苑伝下など古典の記述を参看しながら, 温庭筠に本症候群が妥当するかどうか検討を行った。